

季節は春。日差しが暖かい日のことだった。

緑の葉が主張し始めた桜並木を通り、慣れた足取りで大学に向かう。もう暖かくなってしばらく経つというのに、惰性でコートを着て歩いているために、雲一つない晴天の中で汗が背中を伝う不快感を覚えていた。

僕は今春休み中の二週間程度の帰省から戻り、久しぶりに部屋に顔を出すところだ。部屋は日陰にあるせいか春でも肌寒く、わざわざコートを着ていこうと思ったのもそのためだった。楽器を扱う以上日陰の方が何かと都合が良いからそのような部屋を確保しているらしい。

久しぶりに会う人にはどんな顔で接したら良いだろうかと小心者な考えを巡らせているうちに、すっかり道を覚えた足は僕を部屋の目の前に運んでいた。コンクリート造りで冷たい感じのする建物だ。日陰にあるのもその印象に拍車をかけている。一瞬躊躇いながらも、扉の前で立ち尽くすところを見られた方がよっぽど気まずいと思い直し、ドアノブを回す。

「こんにちは」

僕が挨拶しながら入ってきたのを見て、皆ちらつとこちらを見て挨拶を返す。まだ活動時間にはなっていないため、皆談笑したり楽器を手入れしたりと思いきいのことをしている。

室内を見回したところ、どうやら部活でいつもよく話す友達はまだ来ていないようだ。僕は幽霊部員ではないが、活動に毎回熱心に参加するような人間でもなかった。そもそもサークルメンバーが多く全員とは話しきれないというのがあるが、そんな事情もあって全員と気安く話すまでには

「至らないまま、気付けば二年が経過してしまっていた。

「青山君。ちょうど良かった、君の力を借りたいところだったんだ」

どこか適当なところに腰を落着けようと座る場所を探していたところで会長に話しかけられた。

彼は石井友樹、僕が所属する軽音サークルの会長だ。彼は外交的な明るい性格で、誰からも好かれている。顔は醤油顔と言われる部類に入るだろう。体格は文化部なのにがっしりしているが、これは高校まで野球をしていたからだそうだ。

僕も当然彼を好ましく思っているが、一方で内気で臆病な性格の自分とはどこか住んでいる世界が違うなと思って敬遠はしていた。若干そんな無意識もあって彼とはそこまで懇意ではなかったため、僕に用事がある理由は思いつかなかった。それはそれとして、まだ用件すら聞いていないが、自分が頼られるという珍しい機会を得て僕は内心喜んだ。

「僕にできることならやりますよ。普段あまり貢献できていませんし」

楽器の腕が微妙なこと、活動への参加が不定期なこと、僕が担当する楽器であるキーボードは、ピアノ経験者が多いこのサークルではその気になれば他にも使える人が多い。その辺の理由から、僕は自分でも貢献度が低いと感じていた。もつともそれにより支障が出ていないだろうという打算もあって消極的でい続けたのだが。

「もうすぐ新年度だろ？ それで新入生の勧誘をどうしようかと考えてたところで耳が早い新入生が見学に来てくれたんだ。楽器はギター志望」会長の視線を辿ると、なるほど少し所在なさげにしている新顔が見えた。「ギターなら僕じゃない方が良いんじゃないですか？ 相沢さんとか」

「それがな、彼は作曲を試みたらしいんだ。今まで既存の曲を演奏し

てきてはいたものの、踏み込んだ音楽の知識はまだらしい。そこで作曲をしたことがあるっていう青山君と話させるのが良いんじゃないかと思っ  
てな」

「なるほど」

確かに僕は楽器の演奏以外の音楽理論的な知識が割とあるし、作曲もしたことがある。しかしそれをサークルに楽曲提供したわけでもなく、いわゆるパソコンで打ち込むだけで作った曲だ。自分で作った曲にあまり自信はなかったから声高には言ってこなかったが、周りの人はみんな音楽に興味があるので作曲の話題は会話を繋げる役には立っていた。

その程度の実力という自覚があるし、熱心に頑張れば一年と経たず僕を追い越すだろうとも思う。しかしそれはそれとして、最初は経験者の話を聞いた方が格段にやりやすいだろうというのもまた想像できることだった。

そんなことを考えながら僕が件の新入生に視線を向けていると、会長は「じゃあよろしく!」と言ってどこかへ行ってしまった。頼むと言いながら半ば押しつけるように僕に任せてくる、そんなことができる思い切った部分も彼との隔たりを感じる一例だった。まあそれでも頼られて悪い気がないのは、彼の性格と普段の行いがあるからだろう。

退路を断たれて僕は彼に向かっていった。軽く挨拶すると相手からも「こんにちは」と返ってきた。僕は目を合わせるのが苦手で、声をかけつつもつい無意識に視線を外してしまっていた。そのとき緊張していた僕はそのことには気づけなかった。

さっきまで会長が座っていたであろう椅子に腰を下ろす。

「石井会長から話は聞きました。僕は今度三年になる青山大輔って言いま

す。まずは見学に来てくれてありがとうございます」

当たり障りのない言葉から入る。

「新入生の浅井一輝です。よろしく願います」

まだ高校生の雰囲気が残る表情と、比較的小柄な体格。服は派手すぎない程度に着飾っていて、爽やかな大学生と言うに相応しい装いだった。僕はフアッションに詳しくないが、きっと彼はセンスがある部類だろうと見当がついた。

「こちらこそよろしく願います。それで本題なんですけど、作曲をしてみたいんですか?」

「はい、楽器はギターを高校から練習していたのですが、こうして色んな楽器と併せられるなら自分で曲を作ってみたいと思って」

彼はサークルの人達と演奏する目的で曲を作りたいらしい。コピーバンドが多いこのサークルの活動方針とはあまり噛み合わないが……バンドメンバーでも引き抜こうと考えているのだろうか。

「そういうことなら、僕は少しだけ経験があるので多少は力になれるかなと思います。聞きたいことがあったら聞いてください。もともと僕より浅井さんの方が知識があるかもしれませんがね」

僕はそう自嘲気味に言うが、彼ははいえいと首を横に振る。

「コード名とかはわかるんですが、自分で進行を組み立てるとかはさっぱりです」

「なるほど、それなら僕でも少しは役に立てそうですね。僕自身も色々勉強しながらになるとは思います」

彼の言葉は謙遜だったかもしれないが、言葉通りならまだ僕は彼に伝えるべき知識がある。そのことに内心安堵した。

「それなら何から始めようか。多分ダイアトニックコードの機能くらいは知ってるだろうし、セカンダリードミナントあたりからが良いかな。……あ、他に優先してやりたいことがなければだけど……」

つい自分の得意なことになるとべらべら喋ってしまう。自分のそういう小物な部分には気をつけたいと常々思っているのだが、中々難しいものだと内心恥じる。

「えっと、せっかくなんですがひとまずこのサークルのことを聞いても良いですか？ あとは活動の見学もしたいのでできればそれ以外の時間で……って、迷惑ですよ。すみません」

「いえ、そんなことありませんよ。全然大丈夫です。……それにほら、教えながら勉強になるってこともありますし」

「ありがとうございます。それじゃあ音楽の話は練習が終わった後とかに聞いても良いですか？」

「はい、大丈夫ですよ。今の時期僕は暇なのでしばらく練習したら手が空くと思います。……っと、ひとまずサークルの説明をするんでしたね」

とは言ったものの、何の変哲もない軽音サークルだ。活動は忙しい時期を除いて毎週火曜と土曜で自由参加なこと、会費さえ払っていれば色々と自由なこと、楽器は自分で持ち込む必要があることなどなど思いつく限り説明していった。

ちょうど話題がなくなったらあたりで会長が戻ってきた。間を持たせるのは苦手なので内心ホッとした。あちこちで会話している中で会長が軽く手を叩いた後声を張り上げる。

「はい、みんなお待ちせ！」

その一声を聞いて皆は手を止め会長に視線を向ける。

「じゃあ今日も活動を始めます。いつも通りチューニングと基礎練習の時間を三十分とって、その後で新歓用の曲のリハーサルをするのでよろしく。時間になったらまた声をかけるので各々活動どうぞ」

何度も飛ばした指示だ。回数を重ねる毎にどんどん簡素になっていったが、皆まで言われずとも意図は伝わる。そのくらいは顔を合わせた間柄だ。今度は楽器の音で騒がしくなった中で、会長は僕と浅井君を手招きする。さすがにこれだけうるさい中では会話もままならないという感じた。僕は浅井君に軽く目配せして共に部室の外に向かった。

「青山君、押しつけちゃってごめんね。急にサークル関連で仕事ができちゃって」

「いえいえ、全然大丈夫です」

「ありがとうございます。それで、どこまで話したんだっけ」

そう言いながら会長は浅井君の方に向き直る。

「青山さんから活動については一通りお聞きしました。音楽の話は練習風景を見てから時間があったら聞かせていただこうという流れになりました」

「そっかそっか。まあ見学だけでも良いんだけどせっかくならギター弾いていく？ 物置に仕舞ってたやつだからそんなに良い物じゃないけど」

「あー……じゃあ使わせていただいていいですか？」

「もちろん」

相変わらず会長は話を進めるのが上手いな。そんなことを思いつつ、僕も浅井君の腕前が気になった。単純に実力を知りたいというのもあるし、音楽の教えやすさは楽器をスラスラ使えるかどうかで変わってくるとい

うのもあった。

「僕もちょっと見ていいですか？」

そう言うのと浅井君は注目されるのに慣れていないのか少し気恥ずかしそうにこう言った。

「俺のギターなんて大したことないですよ。でもご指導いただけるならありがたいです」

それを聞いて僕と会長は顔を見合わせて笑った。きよんとする浅井君に向かって会長は言った。

「いや何でもないんだ、こっちの話。一昨年入ってきた相沢君が同じようなことを言ってたのに、当時のうちのサークルの誰よりもギターが上手かったって出来事を思い出しちゃって」

結論から言うと浅井君のギターは上手かった。さすがに相沢さんには負けているだろうが、即戦力とはつきり言えるくらいは素人目にも上手かった。

「すごいな浅井君！ これならもうバンドに入れたいくらいだよ」

一通り弾く様子を見終えて会長が言う。僕も無言でそれに頷いた。

「ありがとうございます。でも合わせる経験がないのでまだまだバンドでは難しいと思います」

「あー、それはみんな最初は引っかかるところだからなあ。まあそのうち身につくさ」

実際得意な楽器でも他人と合わせるのは難しい。僕もその経験があったからわかる。だからこそびったり息が合ったときの楽しさが醍醐味なのだ。

「ちょっと聞いておきたいんですが、このフレーズってどうやって弾くのが良いと思いますか？」

そう言いながらさっきの曲の一部を演奏する。

「今の弾き方も正解なんだけど、リズムを考えると気持ち早めにフレットを移動した方が良いかな。案外その方が響きが自然になるし」

「こうですか？」

「そうそう。あとは二弦を開放してもこの場合は問題ないし、指も動かしやすくなるから」

「なるほど、勉強になります」

浅井君は真面目な顔で会長の指導を受ける。僕も相槌を打ったりそれとなく一言加えるくらいはするのだが、そもそもギターについては会長の方が実力があるからあまり出る幕がない。

なんとなく覚悟していたことなのだが、新人生よりギターの腕前が低い自分を無意識に感じて劣等感に苛まれる。僕のメインはキーボードだが、最初はギターをやリたかった。大学に入ってから練習して多少は上達したと思うが、周囲の上手い人達を見てなんだか虚しくなつてやめてしまった。もうギターは埃を被っている。

目の前の会話に意識が向いているために、僕はそんな心の動きをはつきりとは意識しないまま、漠然とした居心地の悪さを感じていた。

そのとき、会長が持っていたストップウォッチが鳴った。

「おっと、もう時間か。リハーサルをやるから良かったら見ていく？」

「ぜひ見せてください」

浅井君を送り出して、僕と会長は二人で遅れて楽器やコンディションの

調整をする。珍しい組み合わせでちょっと気まずいが、どうやら気まずいのはこっちだけのようだった。

「いやー、期待の新人が来てくれて嬉しいな」

「そうですね。他に流れないようにしっかりと確保したいところです」

「そのためにも演奏頑張らないとな」

そう言いながら会長はギターをチューニングする。直後、防音壁を越えて演奏の音が伝わってくる。新歓のために練習していたのは今流行りのポップスだ。

「ところで、作曲の方はどうだった？」

「まあできる限りのことはしたいと思います。どのくらいのものができるかは結局彼次第などところがあるので」

「そっか。うちに詳しい人がいてくれて良かったよ。中々作曲まで知識がある人は少ないからな」

確かに僕は作曲の知識はあるし、曲も作ったことがある。しかしそれはあくまで曲の体裁を為しているというだけで、普段人々が耳にしているような心を打つものを作れた記憶はなかった。それは僕のギターの腕前と同じで、他の人の努力には追いつけないと思って、積み重ねを諦めてしまったからだったのかもしれない。

その後は僕たちのグループのリハーサルもあったが、特に問題なく終わった。軽い反省会を終え、軽くそこを練習すればひとまず今日の活動は終わりだ。

外から聞いている分にはあまりわからないらしいが、特に自分が熟知している自分のパートについては結構ミスが見つかるものだ。反省すべき点

は多かった。

「じゃあこれで今日の活動は終わります。皆さんお疲れ様でした！ 来週以降の新歓のための発表も頑張りましょう！」

まばらに「お疲れ様でした」と声が上がリ、各々帰宅の準備を始める。僕はその中で浅井君を探した。彼はすぐに見つかった。相沢さんと話しているところのようだ。

「ーじゃあよろしくお願いします。本当にありがとうございます」

どうやら浅井君が相沢さんに何やら頼み込んでいたようだ。

それじゃ、と軽く手を上げて相沢さんが帰るのと反対に、僕は浅井君に向かって歩いて行く。

「あ、青山さん。その、さっきは急なお願いをしてしまつてすみません。忙しかったらまた別の機会でも大丈夫ですので……」

「いや、全然大丈夫ですよ。それよりさっきは何の話？」

そう聞くと彼は心なしに嬉しそうにこう言った。

「実は相沢さんにギターを教えていただけのことになりました。そんなに時間は取れないのですが、十分以上にありがたいです」

どうやら彼は着々と自分を成長させる手はずを整えているらしい。果たして僕が一年のときはここまでやる気を持っていただろうか……。そう思いながら僕は彼に音楽を教えるために小部屋の扉を押し開ける。彼を見ていると嫌でも感じてしまう後ろめたさには目を背けたままに。

「こうやってできるメジャースケール上の七つの和音をダイアトニックコードって言うのは知っているとします。実はそれぞれ役割があつて、

それを元に組み立てることで音楽が出来上がります」

キーボードを鳴らしながら僕はコードの説明をする。すり合わせも兼ねて基礎から話をすることになったが、ここまではもうどこかで聞いた話だったようだ。

「トニック、サブドミナント、ドミナントの三つに分類されて、それぞれ進める先が違っていきます。トニックは三つどれにでも進めますが、ドミナントは基本的にトニックにしか進めません。サブドミナントはドミナントかトニックに進めますね。もちろん例外はあるんですが……」

今は本も何も手元にないので、思いついたことをひたすら説明していく。冷静になれば一氣にこれだけの話をしても覚えきれないと思うのだが、浅井君は予備知識と音楽的な経験値からスラスラと理解していく。

「例えばCEGCGの順番に鳴らすとこんな風に自然になります」

その通りの音をキーボードで鳴らす。

「……なるほど、今はトニック、サブドミナント、ドミナント、トニックの順になっているわけですね」

僕が鳴らした音を彼はギターですぐ再現する。そして納得するとノートに何やら書き込んでいく。これだけ音楽の素地があるとすぐに僕の知識なんて追い抜かれそうに感じる。

「そうそう。他にも色々あるからそれはそのうち説明しようかな。それで大事なのはイメージだけど、ドミナントが緊張で、トニックが解放が解決って感じかな」

あまりじっくり来ていないようだったので実際に音を交えて説明する。「こうやってGを鳴らしているとなんとなくつんのめった感じがすると思う。で、Cを鳴らすと一節が終わった感じになる」

「なるほど……」

彼は自分で音を鳴らして確かめながら納得していく。

「やっぱり物語と同じで音楽も緊張と緩和なんですね」

「そうですね。実はこの緊張も色々と種類があって、応用するとかなり表現の幅が広がるんですよ。例えば――」

そうして僕は時間の許す限り彼に知識を与えていった。自分の好きなことを語るのは楽しいことだ。段々と饒舌になっていくのを感じながらも、語りは止まらない。何もかも僕よりすぐ見える彼に対して、少しでも役に立っている実感があったのも嬉しかった。

時間いっぱい話した後、特に何事もなくその日は解散した。帰りながら間違ったことを教えていなかったかと心配になったり、一方的に話しすぎたんじゃないかと思ったりはしたが、まあそれもいつものことだった。

あるなんでもない休日の夜のこと。ベッドに寝転びながら、ため息をつく。

今日も、何もしないまま終わってしまった。

あれから何度も浅井君に音楽理論を教えて、そのたびに彼に感心し、そのたびに自分ももっと頑張ろうと思う。それなのに、いざ家に着くといつも電池が切れたようにふっと向上心が消え失せてしまう。

そんなことをもう何回も繰り返した気がする。いや、振り返ればそんな夜しかなかったような気さえする。それに、これは音楽に限った話ではなかった。

寝返りを打ち、散らかった机の方をチラッと見る。ベッドより少し高い

位置にある机の上は見えない。だが反射的にそこに置いてあるはずの紙のことを思い出す。就活に向けた諸々の対策や準備のセミナーを開催するという内容だったはずだ。

僕ももう三年生だから、就活を始めないといけない。向き合わないといけないことなのに、考え始めると全てが億劫になってしまう。それは怠惰というより、逃避だった。

結局僕は自分でつかみ取ったものが何もないのかもしれない。全部、流された先で気付けばつかませてもらったものだ。ピアノだって親に習わされたから身についた。勉強だってそれをすれば良いと言われたから頑張れた。だから自分でつかみ取らないといけない就職というものに初めて出くわして、それがたまらなく怖いのだと思う。

また、ため息をつく。何へのため息なのかは自分でもわからないが、そうしないとモヤモヤとした圧迫感で一杯になってしまいそうで、ただゆっくりと息を吐き出す。

人生というものは、いつからこんなに気が滅入るものになったのだろうか。何をしていてもどこかに焦燥感と後悔が居座っていて、楽しさというものはまるで僕のものではなくなってしまったかのようだった。

ふと時計を見ると、もう日付が変わっていた。明日は一限があるということをお願い出した。

そうだ、音楽を聞こう。

気分が曇る度に、そんな僕の心をなぞってくれる音楽を探してくる。処方箋のように楽しむ音楽だ。気付けばそんな楽しみばかり増えてきた気がする。

でもこれは結局自分の言葉を言ってくれる音楽を探して聞いているだ

けなのだ。自分の中に言葉はあるのに、それを自分で自分に言っているのと変わらないのに、音楽で聞かないとどうにもそれらの言葉は上滑りしてしまった。

音楽を聞くと、少し気分が楽になった。あるいは、流れる音楽とともに心の膿をどこかへ流してやっているのかもしれない。

だがその間も心は焦りに飲まれている。こうして何も生み出さず、音楽で心を慰めている場合ではないのではないか。でもこの気持ちをどうにかしないと何も手に着かない気がする。そんなことをグルグルと考えている間に曲はもう終わりがかけている。

何をしていても心が安らがないのではないかとすら思ってしまう。その隙間を縫って、どうにか音を心の中に忍び込ませる。今はきつと、それしかできないから。

なぜ僕は今こんな気持ちになっているのだろうか？

そして、そんな気持ちを夜のせいにして、眠る。それはなんでもない夜のことであった。

「それにしても、音楽って凄いですね」

いつものように浅井君に音楽理論を教え、また僕自身も彼に少しギターを教えてもらった日の帰り道のこと。帰り道が同じ方向だからこうして歩きながら話することも多いのだ。

僕は軽く頷いて彼に言葉の先を促す。

「音ってそれ自体はただ周波数が違う振動でしかないわけですよ。それが組み合わせることで人の心に喜びとか悲しみとかのイメージを与えら

れるってすごく不思議な気がします」

「僕もそう思います。コードだってスケールだって、構成音のうち一音が半音違うだけで全く違う印象になりますし」

例えばメジャーコードとマイナーコードは真ん中の音が半音違うだけだ。たったそれだけなのに、人の印象を変えることができてしまう。た少し周波数が違うだけで、音の組み合わせは不思議なほどその表情を変える。

歌詞がない曲にも人は印象を抱く。音は感情と直接結びつく。

「きっと、だから音楽って人の心に響くんでしょうね」

僕は頷く。

音楽は、人の心に直接触れることができると思う。だから僕は音楽を聞くのだろうか。

それから数ヶ月が経った。その間も浅井君は順調に伸びていた。僕が勧めた本もいつの間にか買って自分で読み進めていた。そうなってくると僕が教えることはあまりないように思ったが、経験から来る知識が欲しいと言われてたまに質問会のような形になっていた。その頃には彼も練習がてら作曲を始めていて、お互いに作った曲をたたき台にして議論していくことも多くなった。

僕も負けじと音楽理論の勉強をするようになった。音楽をしている時だけは現実を忘れられたのも理由かもしれない。だが一番の理由は、これさえ負けてしまったら僕にはもう何もない、そんな気がしてしまったからなのだろう。

季節は巡り、夏真っ盛りだ。日陰で涼しいはずの部室も、この時期はエアコンをつけざるを得ない。

「今年も例年通り文化祭でバンドを組むことにしようと思います。人数も結構いるので何組か作れると思いますが、人員は各々バランスをとるようだけに気をつけてください」

今年もこの時期が来た。例年うちのサークルでは何組かコピーバンドを作って文化祭でライブをする。僕も今まで二回それをしてきた。もちろん他に地域のイベントなんかに参加することもあったが、文化祭は一番の見せ場という感じだった。

「今日はいない人もいるからここで決めるのも微妙だと思っし、二週間くらい目安でグループを決定するとして、できたグループから曲とかを考えていく感じで良いかな？」

皆頷いて同意を示す。

「じゃあ何もなかったらあとは各々に任せることになるけど、ここまでで質問ある人は……？」

そこで一人がスツと手を挙げる。浅井君だ。

「そのバンドって、オリジナル曲を演奏しても良いんですか？」

オリジナル曲の演奏はこしばらくないことだった。だが自分でメンバーを集め、曲も用意できるのなら、あえてそれを止める理由はないという結論になった。確かに例は少ないが、何年か前にはコピーバンドでなくオリジナル曲をしたグループもあったらしく、それを見る限り問題はなさそ



うという保証もあった。

会長がその辺のことを話し終えた後は、各々練習なりメンバーの勧誘なりを始めた。僕にも勧誘は来た。

「青山さん、僕のバンドのメンバーになってくれませんか？ ギターとキーボードどっちでも合わせて曲作ります」

うぬぼれではないが、予想はしていた。やはりこういうのは親しい人を誘った方がやりやすいものだし、練習も良い空気で行ける。

「誘ってくれたのは嬉しいけど、ギターは別に誰か用意した方が良いと思うよ」

「俺も、青山さんには得意なキーボードを弾いて欲しいと思っています。人が見つからなくても俺がギターボーカルをすればなんとかなりますし。それに、キーボードはバンドの曲を作るなら入れたいと思っていました」  
なんとなく、僕のギターの腕前が微妙なことを遠回しにフォローしているように感じるのには穿つてものを見過ぎだろうか。だが腕前のことは事実で、何も怒るようなことではない。そう頭では理解していても、一瞬胸がズキリとする感覚は誤魔化せなかった。

「ありがとう。でもやっぱりギターは別にいた方が……」

ギターボーカルは確かに可能だ。だが、意識を二分されてはパフォーマンスも落ちる。なら初めからボーカル側の負担を減らすために人員を用意すべきだ。問題はオリジナル曲という、ともすれば危ない船に乗ってくれる人がいるかどうかだ……。

「それ、俺がギターやってもいいかな？」

そこに現れたのは相沢さんだった。

「え！？ 相沢さんがしてくれるなら嬉しいですけど……良いんです

か？」

当然、浅井君は驚いた様子だ。

「うん。どうせ今年で最後だし、何か今までと違うことをして締めたかったらね」

「ありがとうございます！」

願ってもない協力者に、幸先の良さを感じる。この調子でベースとドラムも見つかればよいのだが……と思っていたところ、

「あとベースとドラムなら興味ありそうな人誘ってくるけどそれでいい？」

と、相沢さんがサラツと言つてのける。

「ほんとですか！？ ありがとうございます！」

「よろしくお願いします」

僕たちの返事を聞くと、相沢さんは部屋の奥の方へ向かい、そこで練習を始めていた二人に声をかけた。しばらく話した後、その二人を連れてこちらへ戻ってきた。

「二人とも〇ズだって。というわけであらためてよろしくね」

「ベースの水野美香です。よろしく願います。元々気になってはいたんですが、浅井君とはあんまり関わりないから遠慮しちゃって。楽しそうだから参加できたら嬉しいですよ」

水野さんは僕の一つ下で、二年の後輩だ。彼女はロックを好んでいて、今の全身を黒系統で統一した服装も心なしかロックさを感じる。ベースの腕前は確かだ。

「ドラムの田中雄祐です。正直俺は下手だと思うので皆さんの足を引っ張らないか不安で入れなかったのですが、俺でも良いなら是非やってみたい

です」

と、本人は言っているが、実際のところ他のドラマーに引けを取らない腕前だ。ただドラムを始めたのが大学からという理由で他の経験者に引け目を感じているようだが、三年生になった今ではその差は見当たらない。純朴そうな顔をしているが、彼のドラムは熱気を感じさせる。

「お二人がいれば心強いです！　こちらこそよろしく願います」

こうして気持ちを率直に伝えられるのは浅井君の強みだ。いや、彼はこの数ヶ月で人付き合いのやり方を覚えたのだろう。

こうしてトントン拍子にベースの水野美香さんとドラムの田中雄祐さんがバンドメンバーに加わり、無事人員は集められた。すると次は当然オリジナル曲をどうするかという話になるが、これも僕は予想がついた。

「最初の三曲は既存のもので、最後に一曲だけオリジナル曲を出すつもりです。それで、肝心の曲なんですが、俺が作ろうと思います」

そう、そのために彼は音楽理論を学んだのだ。そのことをあまり知らなかっただろう水野さんと田中さんは、少し驚いたようだった。

「もちろん各パートの皆さんに最終的な微調整はしていただくことになると思いますが、基本の作詞作曲は俺がしようと思います。まだ信頼勝ち取っていないので皆さんは不安かもしれませんが、そのための努力はしてきたつもりです。近いうちに結果で示せるように頑張ります」

「つまり、素案は近いうちに出示してくれるってことで良いのかな？」

相沢さんはあまり驚いていない様子だ。もしかしたら先にこのことを軽く聞いていたのかもしれない。

「はい、各パートを完成させるのは時間がかかるでしょうが、コードとメロディーと歌詞くらいは用意できるはずです。今まで作曲してきた中でア

イディアはいくつか見つけてあります」

「なら任せるよ。多分君なら大丈夫だろう」

相沢さんは浅井君にギターを教える中で何か感じたものがあるのか、彼のことを信頼しているようだった。僕もそれには同意する。彼にはセンスと経験の両輪がある。水野さんと田中さんの二人も、相沢さんを信頼してか納得したように頷きを返した。

「不安はありますけど、そのための準備はできているつもりです。これからよろしく願います」

大学に入りたてのときのどこか幼さの残る自信がない立ち振る舞いはどこへやら、今では浅井君は立派に人を率いる力を持っているのだ。……二個上の先輩の僕が率いられている立場なので情けなくはあるのだが。

その後浅井君は申請書か何かを書くために会長に相談に行き、水野さんと田中さんはその間練習に戻るようだった。なぜか、相沢さんは残っていた。

「青山君はさ、浅井君のことどう思う？」

「どうって言いますと？」

相沢さんは一拍おいて続けた。

「音楽の、才能」

次の言葉を考えつつ、僕は頷く。

「彼は……才能も努力も兼ね備えていると思います。僕はギターにそこまです詳しいわけではないですが、それでも彼のギターが上手いことはわかります。このまま行けばそれこそ相沢さんみたいになるんじゃないかなって」それを聞いた相沢さんの顔は真剣そのものだった。

「多分だけど、彼はもう数年と経たずに俺のことは追い抜いていくと思うよ」

「え？ そう……なんですか？」

今だって、相沢さんは浅井君にギターを教えている立場なのに。

「どこかで聞いたかもしれないけど、俺は彼にギターを教えているんだ」僕は頷く。

「今は確かに俺の方が実力は上だ。だけど、彼がギターを始めたのは高二の夏だ。俺は中学生からやってこれだ。期間に対して成長率が明らかに高いんだ。いや、というよりむしろ感覚的な部分でわかることだな。きっとこういう人が伸びる。わかるんだ」

それは、研鑽を積んできた相沢さんのような人にはわかる感覚のようだった。でも、そうしたらいつか教えた相手に追い越されることになるんじゃないか。

「それって……怖くはないんですか？」

ちやうど、僕が作曲では負けたくないと思っているのと同じように。

「昔は怖かったよ。でも、そういうことって俺にとつては別に初めてじゃないんだ。プロだって今ならネットでいくらでも探せる。今は小さい会場でしか演奏していないようなインディーズのバンドでも、すごい人は沢山いる。だから俺がやる意味なんてあるのかと思つてた時期もあったよ」

内容とは裏腹に、相沢さんの表情は諦めとも劣等感とも違つていた。

「でも、結局キリがないって気付いて、やめた。何より、人がどんなにすごいことをしていても、結局自分は何も満足できないから。だって、そうでしょ？」

そう言つて相沢さんはニヤリとした。

何を言おうとしているのかようやくわかった気がする。陳腐な言葉で言えば、上には上がいる、自分は一人しかない、ただそれだけだ。だが、薄っぺらく思えていたそんな言葉は、今この瞬間によりやく魂を吹き込まれたみたいだった。

「なんというか、相沢さんみたいな人にはコンプレックスなんてないのかと思つていました」

相沢さんはそれを聞くと少しおかしそうに笑つた。

「いやあ、そんな人間がいるなら俺も会つてみたいもんだよ。でもまあ、そう見えてるなら大成功つてところかな」

僕もつられて笑つた。

そこへちやうど浅井君がやつてきた。

「申請書もらつてきましたよ。というわけでまずは既存の三曲を何にするか相談だけしちやいましょう」

もしかしたら、彼もそうなのだろうか。笑いの余韻をかみ殺しつつ、そんなことを考えてしまふ。少し、人が怖くなくなった気がした。

それからまた二週間ほど経つた。残る三曲は早々に決まり、各パートですり合わせる段階まで来ていた。

楽譜を元に、今のバンド構成で映えるように調整を重ねた。今日はひとまず満足のいく修正まで行い、しばらくは各自習熟に努めるという感じになった。もつともここから仕上げるまでが長いとも言えるのだが。

「よし、これで今日やりたかったことは一通り終わったかな。それじゃあこれから少しずつ完成度を上げていくために、各自で練習よろしく。今日

はお疲れ様」

お疲れ様でした、と声上がる。最初は関わりが薄かった一部のメンバーとも、二週間で少しは互いに打ち解けてきた感じがする。

「浅井君の方の進捗はどんな感じ？」

バンドリーダーこそ相沢さんだが、オリジナル曲という主軸は浅井君が握っている。ボーカルも彼だ。ちなみに行き詰まったとしても定期的に報告するように相沢さんからは既に釘を刺されている。

「一応、形にはなりました。ただ……」

「ただ？」

「……少し、曲として味気ないんですね」

「まあそんなこともあるだろう。とりあえずみんなで聞いてみて何かアイデアがないか募るのが良いと思うけど、それでいい？」

「俺としてもそのつもりでした。忌憚ない意見をよろしくお願いします」  
音源は適当なままですが、と言いつつ出来上がった曲を再生する。

結論から言うと、正直出来は悪くなかった。彼が裏で何度も練習として作曲している成果が出たのだと、僕は知っている。努力の跡が感じられる曲だった。歌詞だって無理なくメロディーに乗っている。これを一人で完成させたというのは素晴らしい成果だ。

だが一方で、作曲経験者としては、いや現代の音楽に慣れ親しんだ者としては、どこか物足りなさを感じるものだった。これは仮の結果でしかなく、これから編曲していくのだろう。それにしても全体的な進行に单调さが否めなかった。言い換えれば音楽として定番すぎたのだ。

「メロディーもリリックも良くできている。この辺はセンスが良い。だが

なんとか全体的に……」

「ありきたりな進行……」

「やっぱりそう思いますか？ 俺もそこどうにも払拭できなくて。」

大学に入ってから学び始めてここまで音楽理論を物にしたのは確かにすごい。だが音楽理論の視点で曲を見つめる経験が圧倒的に不足していたのだ。これまで彼に教えてこられたのは音楽理論の基礎であり、スポーツで言うところの型だ。いくら素振りだけをして、野球はうまくならない。「水野さんはどう思いますか？ ベーシストとして」

「んー、ベースラインはギタリストの浅井君には管轄外だと思うし私が調整すれば良いけど、今の進行の感じだと下手にいじったときベースだけ浮きそうなんだよね」

浅井君は続いて田中さんの方に目を向ける。

「ドラムとしても同じですね。ただそうなると全体的に上手いこと変えないといけないってのがちよつと難易度高そうですね」

みなどう改善したものかと頭を悩ませる。その中で顔を上げていた浅井君と僕の目が合った。

「……青山さんはどう思いますか？」

「僕は結構ここからやりようがあると思うよ。軸はしっかりしてるし、定番っぽい雰囲気も四和音、テンションコード、借用和音で意外と覆せる」

「……やっぱり」

やっぱり？ 僕は顔に疑問符を浮かべた。浅井君は目を外し少し考え込む素振りを見せたが、すぐこちらに向き直った。

「やっぱり、青山さんに編曲をお願いしたいです」

「え？」

これは予想していない返答だった。少しアドバイスするくらいはできるかなと思っていたが、他人の作った曲を自分がどうにかできる自信はなかった。

自分が頼られたという嬉しさより、今このときは僕にはそんなことはできないという否定の気持ちの方が強く湧き起こっていた。

「いや、でも、僕がそんな……」

突然スポットライトが当たったかのような感覚に、背中からじわりと汗がにじみ出る。

「俺は良いと思うよ。さっきの口ぶりを見る限り、ここからどうすれば良いかなんとなくわかってるんじゃない？」

「相沢さんまで……」

何か言わなくてはと思うが、頭の中は真っ白だった。何か自分ではダメだという理由を並べなければならぬ気がする。

「僕は……」

「俺は、このままじゃ何も成せないまま一生が終わってしまうんじゃないかって、高校生の頃に怖くなったんです」

僕は緊張して机を睨んでいた目線を恐る恐る上げた。

「ギターを始めたのはそれが理由でした。気付けばギターに没頭して、しばらくは悩みも消えていました。でもやっぱり自分で表現したい、曲を作りたいって、そう思ったんです。曲を作れば、俺でも何か残せるんじゃないかって思って。だから大学に入ってから色々教えてもらっていました」

僕は浅井君の目を見た。

「青山さんに編曲して欲しい理由を挙げるなら、確かに理屈っぽいことはいくつも言えます。青山さんの作った曲を見て、単純に完成度が高いと感

じました。それに、いつも話していて音楽の知識と経験が豊富だとわかりました。それも理由です。でも」

僕は、目が離せなかった。

「青山さんなら俺と同じことがわかると思うんです。俺がこの曲で何をしたいのか、俺が何を感じているのか、俺が何を作りたいのか。……だから、青山さんに編曲してほしいです」

そう言われた途端、急にストンと腑に落ちた感覚があった。見学で初めて会ったあのときの浅井君が、きっと彼の心の内だったのだ。どこか遠慮がちで、距離を感じるくらい丁寧で。そして多分、根は臆病だ。

今でこそ彼は何かを振り切って言葉を交わせるようになった。必要に迫られたからかもしれない。だが、長く接していればわかるものがあった。

そして、歌詞にも書かれている不安さと同じ感覚が、僕にはわかる。

その不安ドミナントの解決を、僕が導きたいと思った。

そう考えたら、もう断ろうとは思えなくなった。いや、断ったらきっと後悔すると思った。

ふっと、笑いともつかない息が漏れる。気付けば肩の力は抜けていた。

「やります。いや、やりたいです」

それを聞くと、不安げだった浅井君の顔が期待に変わった。

「やってみたいとわかりませんが、試したいこともいくつか思っています。やっぱり自信はないんですけど、やれるだけやってみようと思います」

そう言い切った瞬間、どこかスッキリした感覚があった。踏ん切りがついた、とでも言うのだろうか。不安はあっても、迷いは消えていた。音楽

を始めたてのときのあのワクワクした感覚が、今このときだけは取り戻せたような気がした。

その日から、僕は四六時中どう編曲するか考えていた。

昔読んだきりで置きっぱなしだった作曲の教科書を引っ張り出して、何かヒントがないか探る。雰囲気似ている既存の曲を聞いて、インスピレーションを得ようとする。理論的に考えて、色々試しながら取捨選択していく。

最初に思いついたような簡単な方法では、理想とはほど遠い出来にしかならなかった。慎重にバランスをとりながら、無数のアプローチを試す。編曲という形は初めてだったが、そこは大した問題ではなかった。言ってしまうえば自分で作った素案に自分で編曲をしているのが、個人での作曲だったからだ。一番の問題は、単純な完成度だった。

頭の中にあるイメージを形にしようとしては、何か違う気がしてやめる。時にはどうやってもそのイメージ通りに作ることができず、自分の経験不足を恨むこともあった。

インスピレーションが湧いて、その通りに作って名曲になるのなんて、ほんの一部だ。結局は泥臭く試行錯誤し、必死に頭を振り絞ってやったことしか身にならないし結果にならないのだ。僕はそれをこのときまで忘れていた気がする。

今まで僕はずっと中途半端だった。これからも中途半端なときの方が多いのかもしれない。でも、ここでもうにかしなかったら、僕は一生このままになってしまいう気がした。だから、ここで取り戻したかった。今この音

楽だけは、中途半端にしたくなかった。

思えば僕はずっと迷っていたのだらう。だが、心の迷いを断ち切る方法は最初から一つだった。飛び込めば良かったのだ。

このときのために僕は音楽理論を学び始めたのかもしれない、なんてことを不意に考えたりもした。

練習の機会の度に意見をもらい、各パートの人の意見を取り入れつつ、修正を重ねた。

「できた……！」

満足の行く出来になったのは、編曲を始めてから実に三週間みっちり考え抜いた後だった。

そして迎えた文化祭当日。楽器の配置が完了したステージ上に、各々緊張した面持ちで開始の合図を待つ。

「それでは、よろしくお願いします」

アナウンスが聞こえると、僕らは一瞬アイコンタクトを交わす。

ドラムの田中さんがリズムをとり、曲が始まる。一曲目は、誰でも聞いたことがあるような曲だ。

始まってしまえば、緊張はもうなくなっていた。思えばこの没頭は音楽の心地よさの一つだ。何回も繰り返してきた手の動きは、もう乱れない。

作曲以外にも色々苦労はあった。思い返せばよく並行して進められたものだ。

パート毎の楽譜がない曲もあったし、その場合は楽譜に落としてさらに今の楽器構成に合わせてアレンジまでする必要があった。その辺は主に相沢さんがやってくれていたが。

もちろん譜読みと習熟にも時間がかかる。ギターボーカルを務める浅井君は、中心ながらバンド自体は初心者ということで、特に大変さがあった。全員で合わせて演奏するというのは、また一段上の習熟を必要とするものだ。

だが、日を重ねる毎にどんどん完成度が上がっていく様子には純粋な喜びがあった。

気付けば一曲目が終わった。軽く汗ばんだ身体を感じながら、楽器に向けていた目を観客の方に向ける。拍手が聞こえる。先の組の演奏で温まりきった場のおかげで、一曲目だというのに熱気を感じる。

観客の前で演奏する経験は何度かしてきたが、今でもこの場に立つと、人波を見下ろす現実感のない景色にクラツと来る。何人かと一瞬目が合った。

拍手が鳴り止んだのを見て、僕たちはまたアイコンタクトを交わす。二曲目は――

三曲目の終わり、浅井君は拍手が終わるのを待った。

「ありがとうございます。ここまででは皆さんご存知の曲も多かったかと思いますが、次は俺たちのオリジナル曲になります」

少し息が上がった様子の浅井君が言った。髪の毛から汗がしたり落ちる。一つ息を吸って、続ける。

「曲名は、『トニック』」

スティックが四回鳴った。それが開始の合図だった。

浅井君が作ったメロディーと歌詞が、僕が組み立てたコードが、流れていく。そのことへの感慨もそこそこに、意識は演奏に研ぎ澄まされていく。自分はキーボードを演奏しているだけなのに、ちょうど別のパートの音が心地良く重なってくるのは、何度経験してもなんだか不思議な感じがする。

一旦キーボードパートが休みに入る。一瞬だけ集中が切れ、浅井君が歌っている声が頭の中に入ってくる。今まであまり意識していなかったのに、急に歌詞が差し込んでくる。

焦りや、卑屈や、後悔。ただ言えは悲しいだけの言葉も、音楽にすればなぜ心地よいものになる。だが、僕にはその表面的な意味だけではなく、もっと深いものがわかった。彼と接してきた時間が、彼の音楽と向き合った時間が、そしてずっと抱えていた自分の気持ち、意味を教えてくれる。僕にはわかる。そう、わかるのだ。

他人と比べて落ち込み、焦る気持ち。でもそんなことに意味はないと開き直って、達観した気になってみたり。ときには卑屈になって自分を守ったり。やっと自分を認められたと思ったのに不意にそれが崩れ落ちたり。そうやって複雑に屈折したコンプレックスに身を苛まれたり。

（なんだ、彼だって同じじゃないか）

そう気付いた途端、急に笑えてきた。それは嘲りでも卑屈でもなかった。確かに、自分が今まで悩んでいたことが急に消えたりはしない。ただ、足りないところは足りないと胸を張れるようになった。後悔したことは後

悔したと言えるようになった。人類の臆病さに、至らなさに、勇氣をもらったのだ。もう怖くない。

サビに差し掛かる。手が鍵盤に触れると、勝手に次の音を紡いでいく。次は転調する。サビだ。

楽しむように、踊るように、訴えるように、手を走らせる。僕にできるのは鍵盤を叩くことだから、それだけで溢れた気持ちを受け止め、表現する。集中により一瞬無意識に呼吸が止まる。かすかな心地よさの感覚だけがあり、残りの感覚は目の前の楽器へと注がれ、研ぎ澄まされていく。突然、比喻でなく周囲の音が消える。たった四小節だが、キーボードソロ。もう楽譜も頭には浮かばず、ただ何度も練習して身体が覚えた手の動きをひたすら再現する。緊張も、喜びさえも、どこかに置き去ってしまったみたいだ。ただせわしなく動く手と、それが奏でる音だけが静まりかえった会場で生きていた。

そして思う。やつぱり僕は、この音が好きだ。僕の心の声の音はきつとギターではなく、ピアノなのだ。やっと、自分で選べた。

相沢さんのギターが入ってくる。それを皮切りに他の音も重なっていく。そして、最後のサビへ――。

音楽は色々ありすぎて、音楽のどこが好きかなんて一言では言えない。だけど、落ち込んだとき、理由もなく悲しいとき、劣等感に苛まれたとき、どうしようもなく後悔したとき、未来が不安になったとき、先に進むのが嫌になったとき、僕を救ってくれたのは音楽だった。

そして、音楽はときにどうしようもなく僕を楽しませる。演奏するのも、聞くのも、作るのも、全部好きだ。楽しいとき、嬉しいとき、僕は音楽に

よってそれを噛み締めることができる。

音楽の意味なんて、曲の意味なんて、一つに決められるものじゃない。音楽は人の心に直接触れる。だから音楽はそのときの心と合わせて一つの作品だ。

今の僕にとってこの音楽は何だろうか。

ああ、きつとあれだ。そう、まるで――

そのとき曲が終わった。トニックで。